



AJEL

日本ラテンアメリカ学会 会 報

2011年3月31日



AJEL

No.104

1. 理事会報告
2. 第32回定期大会の開催と発表者追加募集のお知らせ
3. 研究部会報告
4. 研究部会開催案内
5. 寄稿：「CELAO第4回大会に参加して」
6. 新刊書紹介
7. 事務局から

1. 理事会報告

○第132回理事会議事録

日 時：2011年2月20日(日) 13時～16時

場 所：専修大学神田キャンパス1号館8階、8B会議室

出席者：狐崎(理事長)、新木、石橋、牛田(書記)、浦部、小池、高橋、西島、堀坂

欠席者：受田、落合、岸川

<報告事項>

- (1) 第32回定期大会の準備状況
 - ・浦部理事より発表申請者のリストが資料として提示され、個人発表・パネルの申請件数・内容について報告がなされた。また、岸川理事からの事前報告を基に開催校の準備状況が確認され、次回会報での追加募集についても承認された。
- (2) 秋の研究部会の開催報告、および春の開催予定
 - ・石橋・高橋・牛田各担当理事より秋の研究部会

部会の概要が報告され、次回研究部会を以下の日程・会場で開催することが確認された。

一東日本研究部会：2011年4月2日(土)
13：00～18：00

東京大学駒場1キャンパス18号館4階
コラボレーションルーム1

一西日本研究部会：2011年4月16日(土)
13：00～17：00

神戸大学国際協力研究科第5学舎207号室

一中部日本研究部会：2011年4月9日(土)
14：00～17：00

南山大学名古屋キャンパスL棟9階910
会議室

- ・施設使用料が必要な会場で研究部会を開催することの可否について、石橋理事より事前にメールで問い合わせがあった件に関しては、総会の予算計画提案時に新たな費目を設けて計上することで承認された。今後、研究部会開催に伴う施設使用料の支出については、当該部会の担当理事の判断に委ねる旨、承認された。

(3) 年報

- ・西島理事より、第31号の編集状況と査読・校正の進捗状況について報告があった。併せて、投稿者数増加に向けた方策検討の必要性が提起され、年報掲載論文のHP上での公開の是非や方法についても意見交換が行われた。

(4) 会報

- ・新木理事より、第104号の編集状況について報告があった(3月末発行予定)。

(5) 国際交流・学会会議

・浦部理事より、11月27日に開催された地域研究学会連絡協議会の内容について報告があった。それに基づき本学会として次のとおり対応することが決められた。

- ①日本学術会議の連携会員（近く半数が改選）の適任者について情報提供をしてほしいとの要請については、ラテンアメリカ地域研究では遅野井連携会員が非改選（任満了は平成26年）であることから、今回はとくに情報提供しない（12月のメール審議の再確認）。
- ②国立情報学研究所による学会ホームページ用のサーバーが2012年3月で停止されることについては、本学会としては停止1、2ヵ月前までこれを使用し、その後は民間サーバーに移行することとし、同案を総会に提案する。
- ③学会法人化問題については、本学会は財団法人（平成25年11月までに公益財団法人もしくは一般財団法人への移行手続きをしなければ解散となる）ではないので緊急に対応を要することはなく、また連絡協議会の議論に従えば今後も任意団体のままで存続しても不都合は生じないが、引き続き情報を収集、確認する。

(6) 会計

・堀坂理事より、2月20日現在での予算執行状況について、資料を基に説明があった。加えて、必要経費の実質的内容に合致するよう費目を整理すべきであるとの指摘がなされ、6月の総会に向けた検討事項とすることが確認された。

(7) HP・メーリングリスト

・岸川理事からの事前報告を基に、HPのリニューアル作業（業者に依頼）の進捗状況について確認がなされた。トップページに掲げる学会名の略称として、従来のAJELに英文のJALASを加えることとするが、次回総会にて本学会の正式英文名と略称を念のため確認することで合意した。

<審議事項>

(1) 入退会者について

・事務局より入会希望8件、退会希望1件の申請について報告があり、資料回覧の上、すべて了承された。

(2) 「メーリングリスト」の呼称変更について

・「メーリングリスト」（略称ML）は双方向での発信・受信を前提とすることから、電子メールにより一方的に配信される学会ニュースには本来なじまない呼称である、との岸川理事からの事前の問題提起に基づき議論が行われた。その結果、「学会ニュース」に変更することで了承された。併せて、理事の担当業務名（現「HP・メーリングリスト」担当）を「HP・学会ニュース」と変更することについても了解された。

(3) 学会ニュース配信用のパソコンとスキナーの購入について

・学会ニュース配信ならびにHP更新専用の情報機器を学会として所有する必要があるのではないか、との岸川理事からの事前提案に基づき、パソコンとスキナー各1台の購入が了承された。

(4) 研究部会の性格・開催回数と時期について

・地域研究部会の活性化を趣旨とする素案が浦部理事より提示され、開催回数・時期、研究部会の位置づけ、参加者拡大の方策等について議論が行われた結果、各研究部会担当理事が企画力を発揮し、より柔軟で幅広い運営に努めていくことで合意がなされた。併せて、活性化を促す予算的措置についても検討していくことが了承された。

(5) 定期大会・地域部会参加への支援制度案について

・部会の活性化に向けた研究報告支援制度導入に関する提案が高橋理事よりなされ、年齢別・地域別対象者一覧（同理事作成

資料)を基に検討が行われた。議論の結果、年齢制限を外し、「地域部会活性化のための支援制度」として導入提案する方向で継続審議となった。尚、定期大会における支援制度についても継続審議となった。

(6) 終身会員および在外研究に伴う休会制度の導入について

・狐崎理事長より他学会の事例が資料として提示され、趣旨説明がなされた後、名称は「シニア会員」とし、次回総会での導入提案を目的に継続審議(メール審議)とすることで了承された。

(7) 次回理事会(第133回)について

・2011年6月4日(土)、上智大学にて開催される予定である(時間・場所は未定)。

2. 第32回定期大会の開催と発表者追加募集のお知らせ

第32回定期大会は、2011年6月4日(土)、5日(日)の両日、上智大学で開催されます。

すでにホームページおよび学会ニュースで発表者を募集しましたが、今回は会場・日時の決定が遅れたこと等に鑑み、追加募集を行います。

研究報告をご希望の方は、2011年4月14日(木)必着で、氏名、所属、報告の標題を明記して、下記連絡先までお申し込みください。パネルを希望する場合は、代表者および報告者の氏名、所属、パネルの標題を明記してお申し込みください。また、600字程度の報告要旨・パネルの趣旨説明を提出してください。事務処理を円滑に進めるため、できるだけEメールの利用をお願いいたします。

なお、会場確保の点で収容可能な数を超えて応募があった場合は、Eメールによる学会ニュースを受け取っていない等の事情

で当初の締め切り(2月7日)に間に合わなかった方を優先することがありますので、ご了承ください。

*大会報告を行うには会員資格が必要です。非会員の場合は、報告申し込みと同時に入会申し込み手続きを行ってください。

■報告申し込み連絡先(大会事務局)：

・Eメール：t-kishik@sophia.ac.jp
件名を「定期大会報告希望(氏名)」としてください。

・郵送：〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1

上智大学外国語学部 岸川毅研究室
封筒に「定期大会報告希望」と朱書きしてください。

3. 研究部会報告

下記のように各研究部会の研究会が開催されました。その報告は以下のとおりです。

《東日本部会》

2011年1月8日14時から17時30分まで、東京大学駒場キャンパスで開催。4名の報告者を含む17名が参加した。報告者はいずれも大学院生であり、今回の発表を学位論文・投稿論文へと発展させるための課題を意識した議論が活発に展開された。以下は研究部会委員による評である。

(コーディネーター 石橋 純)

○「大衆動員と政治体制の変化—1964年から2000年のチリ」

星野加代(東京大学大学院)

1990年以降、チリの市民社会における社会運動が「不活発」になったと、多くの先行研究は指摘している。社会不平等がまだ多いチリにおいて社会運動「不活発説」は興味深い。果たして本当なのだろうか。星野会員は「不活発説」は社会運動の数に

注目しているものの、行動様式パターンの変化には着目していないと指摘し、実際は「見えにくくなった」と指摘している。これを実証するために、2次資料のデータを集め、チリの集合行為を体系的に分析した。この問題に着目した星野会員の研究関心を高く評価したい。ただ、会場でも指摘されたように、二次資料のデータ分析では不十分であり、一次資料も扱う必要がある。しかもシンプルな量的分析ではなく、「見えにくくなった」と実証する為には質的分析が不可欠である。加えて、会場から指摘された以下の点も念頭において欲しい。ターミノロジーが曖昧であること、データから伝えたいこと、因果関係、政党、制度などの関連性を指摘していないことなどである。このような問題を踏まえて、星野会員が今後の研究を進めることを期待する。

(ロメロ・イサミ)

○「ブラジルにおける宗教的不寛容の現在—ネオペンテコステ派によるカンドンブレ批判の捉え方」

高橋慶介（一橋大学大学院）

ブラジルのネオペンテコステ派が他宗教に対して行う批判は1980年代後半以降、痛烈を極めてきた。その最大の対象となったのが、ヨルバ系起源を持つカンドンブレだった。本発表において高橋会員は、ペンテコステ派によるカンドンブレ批判とそれに対するカンドンブレの側の反応を紹介しながら、争点となるポイント、両者の主張の類似点を指摘した。中心的に取り上げたのは、福音派からの分派であるネオペンテコステの中でも主要な教会IURDの創設者Edir Macedoの著書に見られる論点、とりわけカンドンブレの憑依実践を悪魔のそれとして批判するそのしかただが、実は憑依の実践に似た儀礼はネオペンテコステ派にも存在するし、何よりも「繁栄」の概

念を重要視する点に関しては類似しているというのが、高橋会員の分析であった。こうした高橋会員の発表に対して、ローマ・カトリックとの関係についての考察が足りないのではないかとコメントが寄せられた。また、発表後半においては、カンドンブレの儀礼場間の相互批判や、カンドンブレに対する研究があまりにも盛んであるという現状（学問による消費）について言及することによって、論点が曖昧になった観があった。しかしそれも、今後の研究への展開の前触れなのだを期待したい。

(柳原孝敦)

○「現代メキシコにおける性愛倫理と家族観—メキシコ市の同性婚認可とその運用状況から」 上村淳志（一橋大学大学院）

メキシコでは、自身レズビアンを公言するPatria Jiménezが下院議員に当選した1997年以来、憲法改正などによって性的マイノリティに対する配慮がなされるようになり、2006年にはメキシコ市で同居社会法が成立、2007年コアウイラ州で民事連帯契約認可、2009年メキシコ市で同性婚認可と相次ぎ、結果、メキシコ市およびコアウイラ州での同性婚が可能になった。上村会員は、こうした法整備の過程を主要政党間の政治的駆け引き、同性婚反対の立場に立つカトリック教会とのやりとり、メディアにおける報道などを紹介しながら明らかにし、とりわけ争点となったのが、同性婚カップルに異性間の夫婦と同じ保護を与えるべきか（「家族」の概念）、養子の扱いをどうするか、の2点であったと分析した。そしてまた、自身ヌエボレオン州モンテレイのメトロポリタン・コミュニティ・チャーチでの調査を行った上村会員は、性的マイノリティに寛容なその教会の利用者の中に、メキシコ市で結婚しモンテレイに戻って夫婦として暮らすカップルが存在す

ること、最高裁判決によってメキシコ市での結婚が他地域での戸籍上も有効とされることが示され、このことによって州法が実質的に国法化していること、の2点を指摘した。以上の発表は、上村会員自身が認めるように、経過報告的な様相が強く、タイトルに掲げた「性愛倫理」の考察と呼ぶには物足りないように思われるが、市民運動やメディア報道などの分析をさらに加えて展開すれば興味深い結果が得られるのではないかとの期待を抱かせるものであった。(柳原孝敦)

○「メキシコ独立運動再考—1811年～1813年テハスを事例に」

二瓶マリ子（東京大学大学院）

二瓶会員はテハスに注目し、独立運動期、テハスは米墨国境地帯として地政学上重要な役割を担っていたことを細かく説明した。なかでも革命派グティエレス・デ・ララに注目した。独立運動期の歴史で忘れられた人物であるが、発表を聞いてその重要性が明らかになり、とても興味深かった。その意味で、二瓶会員を高く評価したい。しかし、発表の主旨がわかりにくかった。テハスの独立、または独立期の通史なのか。それともグティエレス・デ・ララの人物像の説明なのか。博士論文全体構想における当該事例の位置づけ、研究の意図・意義などについて明確に説明すべきであった。今の段階では通史に近い。ただ、改めて指摘するが、グティエレス・デ・ララという人物は興味深い。私自身は、テハスの独立ではなく、グティエレス・デ・ララを軸に論文を書き、学術雑誌に投稿するのを薦めたい。(ロメロ・イサミ)

《中部日本部会》

2010年12月14日（火）15時15分から16時45分まで、南山大学名古屋キャンパ

スにて開催された。今回の研究部会では例外的に、同大ラテンアメリカ研究センターとの共催による公開講演会を企画し、慶應義塾大学名誉教授で現在日本オーラル・ヒストリー学会会長を務めておられる清水透先生を講師としてお招きした。「激変するメキシコ先住民の村チャムーラ」と題し、1979年以来足掛けおよそ30年にわたるチャムーラ村でのフィールドワークでの知見をもとに、過去15年間にみられる激変の様相についてお話しいただいた。特に先住民の都市への大量流入、そして1990年代から現在にいたる米国への出稼ぎ労働の実相に焦点をあて、こうした激変がマクロ社会にいかなる変容を迫りつつあるのかを分析し、またそれが、「発見」以降の500年以上に及ぶアメリカ大陸の歴史の中で、いかなる意味を持っているのかについて考える、というのが本講演の趣旨であった。

平日の午後に開催したこともあり、出席できた会員は7名に留まったが、南山大学の学部生・大学院生、また関東・関西地区からかけつけてくれた大学院生を含め、参加者は総勢200名近くに及んだ。周知のように、清水先生は本学会の会員でもあられ、永年にわたり学会活動にもご貢献されてきた方である。ご講演内容はもとより、清水先生の研究者としての姿勢に感銘を受けた参加者も多く、この講演に参加したことがきっかけで将来、ラテンアメリカ研究者をめざすことになる学生も現れるのではないかと教え子のひとりとしては密かに期待しているところである。

講演会後の懇親会でも、中部日本部会所属会員、南山大学や他大学の大学院生たちを交え、清水先生を囲んで大いに盛り上がった。その多才ぶりと幅広い活動ぶりから、最近では「アグレッシブ・シニア」の異名をとる先生であるが、今後のますますのご健康とご活躍をお祈りして、部会担当

理事からの報告とさせていただきます。

(牛田千鶴：南山大学)

《西日本部会》

2010年12月4日(土)、同志社大学今出川キャンパスにおいて開催された。出席者は9名と小規模ながら、いずれの報告においても報告者と参加者の間で活発な議論・質疑応答が交わされ、極めて有意義な研究会となった。今回の研究会では、磯田会員がペルー政治において、フジモリ元大統領に代表される、アウトサイダーが台頭する要因についての報告、塚本会員がドミニカ共和国出身の米国人作家、フリヤ・アルバレスのヒスパニック文学に見られるメタフィクション性に関する報告、そして田沼会員が他国へと移民していったキューバ人の心境を、「語り口」に焦点を当てつつ紹介したドキュメンタリー報告が行われた。これらの3つの報告は、それぞれ政治学、文学、人類学と専門分野は異なる一方で、「アウトサイダー」としての主体に焦点を当てる点で共通していた。この「アウトサイダー」への関心を軸として3つの報告が有機的につながり、分野横断的かつ建設的な議論をする機会に恵まれた研究会であった。具体的に、以下のような議論が行われた。

最初の磯田報告は、1990年代以降のペルーに焦点を当て、新しい政治アクターとしてのアウトサイダーが大統領として選ばれるための条件を考察した。具体的に、ペルーの1990年、2001年、2006年の大統領選挙を分析した結果、①伝統的な政治エリートとの区別を明確にし、新しいリーダーとして有権者に認識され、②選挙キャンペーンで、中位投票者の選好に近づくことができたアウトサイダー候補が、選挙に勝利したことを示した。アウトサイダーの台頭はポピュリズムとどのように関係する

のか、アウトサイダーのイデオロギーが、中位投票者に近い場合よりも候補者間の中位にある場合に大統領選挙に勝利するのではないか、ペルー市民は、実際にアウトサイダー現象をどのように認識・表現しているのか等について、掘り下げた議論が展開された。

次の塚本報告は、トルヒージョ政権下で反体制活動を行ったために抹殺されたミラバル姉妹が、アルバレスによってフィクション化された効果について考察した。アルバレスは、彼女自身の分身と思われるインタビューアーを登場させることによって、偶像化されたミラバル姉妹「像」を打ち砕き、人間としての姿を浮かび上がらせるとともに、弾圧を免れて生き残った者が抱える心の葛藤を描きたかった、との解釈が提示された。米国のヒスパニック文学において、生き残った者の苦しみというテーマを扱うことは頻繁に見られるのか、スペイン語にも訳されているアルバレスの作品が、ドミニカ共和国での歴史認識やアイデンティティ構築に影響を与えているのか、ポスト・コロニアルというよりポスト・モダン的な文学作品といえるのではないのか、等の論点が提示された。活発な質疑応答を通して、政治的背景を前提としながらも政治的批判を意図的に避け、登場人物の人間描写にこだわるアルバレス作品を、特定のジャンルに分類することの難しさが浮き彫りになった。

最後の田沼報告で紹介されたドキュメンタリー映像は、国外へ移住した7人のキューバ人が、移住という選択や祖国についてどのような思いを抱いているのかについて記録した作品であった。報告者がハバナで知り合った後、5人はイギリス、スペイン、チリ、アメリカへ渡り、アルゼンチン系カナダ人はキューバに残った。彼らが国内外への移動を決意した背景は、単に

社会主義への是非という政治的語り口ではとらえきれないことが、移住先でのインタビューを通じて示された。映像は、能力に見合った将来・待遇が約束されない祖国キューバに対する不満など、マス・メディアで伝えられる機会の少ない移住者の「本音」を見せる一方で、その「語り口」は移住先によっても異なるのでは、との意見が交わされた。その他、キューバにおけるフィデル・カストロ評価、格差問題、移住者からの送金の役割、教育水準など、キューバの現状についての幅広い関心が喚起された。

以下は、各発表者から提出された要旨である。
(高橋百合子：神戸大学)

○「ペルー政治におけるアウトサイダー—1990・2001・2006年大統領選挙を通して—」

磯田沙織(筑波大学大学院博士後期課程)

本報告では、1990年以降のペルーにおいて、アウトサイダー(新しい政治アクター)が出現しやすい状況であったことを指摘した上で、大統領選挙に勝利したアウトサイダーの事例と敗北した事例の違いを分析する。

○「米国におけるヒスパニック文学の考察—Julia Alvarezのフィクション性—」

塚本美穂(福岡女子大学大学院博士後期課程)

本発表では、ドミニカ系アメリカ人作家フリヤ・アルバレスの『蝶の時代』(1994)のフィクション性について考察した。「蝶」の象徴となり、暗殺された実在のミラバル三姉妹のフィクション化と、本作品が書かれた意味について検討した。

○「Cuba Sentimental」(キューバからの移民に関するドキュメンタリー映画)

田沼幸子(大阪大学特任研究員)

本作は、博士論文『ポスト・ユートピア

のキューバー—非常な日常の民族誌』であつかった2-30代の青年たちが、その後移住先でどのように生活し、なにを考えているかを追ったドキュメンタリーである。

4. 研究部会開催案内

下記のように各研究部会の研究会が開催されます。皆様、ふるってご参加ください。

《東日本部会》

日 時：2011年4月2日(土)

13:00～18:00

会 場：東京大学駒場1キャンパス18号館4階コラボレーションルーム3

発表者・発表題目(※各発表者の所属は申し込み時点)：

1. 見田悠子(東京大学大学院)
「死から孤独へ—ガブリエル・ガルシア＝マルケスの小説作品にみる死のオブセッションからの解放—」
2. 横田香穂梨(津田塾大学国際関係研究所研究員)
「プロタゴニズモと主役としてのストリートチルドレン—ブラジル北東部ペルナンブコ州レシフェ市のローカルNGOの思想と実践—」
3. 巽智子(東京外国語大学大学院博士前期課程地域文化研究科言語文化専攻)
「メキシコ先住民言語サユラ・ポボルカ語の人称標示における反転—」
4. 小原正(フランス国立社会科学高等研究院歴史学博士課程)
「メスティサッヘによらない非インディオ化—チアパネカ地域の非インディオ化を中心に—」
5. 和田佳浦(早稲田大学大学院社会科学研究科ラテンアメリカ研究専攻博士課程2年)
「メキシコ南部国境地域における移民—チアパス州ラス・マルガリータスのト

ホラバル民族村落における調査から～」
6. 中沢知史（早稲田大学大学院政治学研
究科修士課程）
「メキシコチアパス州サンクリストバル
市における先住民学習組織 CIDECI
／大地大学の研究—事例紹介とフィー
ルド調査の困難をめぐる省察—」（仮
閉会后、学内にて簡単な懇親会（会費制）
を行なう予定です。こちらにも奮ってご参
加ください。

連絡先：石橋 純（東京大学）
isibasi@ask.c.u-tokyo.ac.jp
柳原孝敦（東京外国語大学）
yanataka@tufs.ac.jp
ロメロ・イサミ（早稲田大学）
isami.romero@aoni.waseda.jp

《中部日本部会》

日 時：2011 年 4 月 9 日（土）
14：00～17：00
会 場：南山大学名古屋キャンパス L 棟 9
階会議室（910 号室）
発表者・発表題目（※各発表者の所属は申
し込み時点）：

1. 野内 遊（名古屋大学大学院博士後期
課程）
「現代メキシコ社会の変容と北部国境
地域」
2. Francis Peddie（フランシス・ペディ、
ヨーク大学（カナダ）大学院博士後期
課程）
“Memory in a Country of Forgetting:
‘Sitios de la memoria’ in Chile in the
New Millennium”（発表言語：英語）

連絡先：牛田千鶴（南山大学）
ushidac@nanzan-u.ac.jp

《西日本部会》

日 時：2011 年 4 月 16 日（土）
13：00～17：00

会 場：神戸大学国際協力研究科（第 5 学
舎）207 号室

（<http://www.gsics.kobe-u.ac.jp/ja/rokkodai.html>）

発表者・発表題目（※各発表者の所属は申
し込み時点）：

1. 吉野達也（神戸大学大学院国際協力研
究科博士後期課程）
「5 年遅れたメキシコ革命の波及—ユ
カタン州におけるサルバドル・アルバ
ラドの改革—」
2. 村上善道（神戸大学大学院経済学研究
科博士後期課程）
「チリにおける 1990 年以降の貿易自由
化政策と産業賃金プレミアム」

連絡先：

高橋百合子（神戸大学）
ytakahashi@people.kobe-u.ac.jp
宮地隆廣（同志社大学）
tmiyachi@mail.doshisha.ac.jp

5. 寄稿：「CELAO 第 4 回大会に 参加して」

山田睦男（国立民族学博物館名誉教授、
CELAO 初代会長、FIEALC 第 11 代会長、
2003-05 年）

2010 年 10 月 22 日から 24 日にかけてメ
キシコのグアダハラハラで CELAO (Consejo
de Estudios Latinoamericanos de Asia y
Oceanía) の第 4 回大会が開催され、参
加することができた。この地域的な学会
は、2003 年 9 月に大阪の国立民族学博物
館と大阪大学千里キャンパスで FIEALC
(Federación Internacional de Estudios
sobre América Latina y el Caribe) 第 11
回大会が開催された折に発足したので、日
本とも関わりが深い。

会場は、都心からややはずれたところ
にある Holiday Inn Select という中規模の近

代的なホテルで、周囲はやや寂しいところだったが、かえって参加者が行事に専念することができた。この学会の歴史上初めて全参加者が宿泊費と食費免除の待遇を受けた。

大会のテーマは、「世界危機に直面するラテンアメリカにおける社会、国家および市場—アジア・太平洋からの視線—」で、この学会の歴史では初めてアジア・オセアニア域外で大会が開催されたため、メキシコ側の関心を反映して、研究発表には、ラテンアメリカとアジアの比較と両地域の関係が重視されていた。

参加者数は、合計 170 名。内訳は、研究発表者 65 名、司会 6 名、聴講者 99 名で、発表者と司会者などの出身国・地域別では、ラテンアメリカ 51 名（うちメキシコ 47）、アジア 11 名（うち日本 5）、オセアニア 4 名、米国 2 名、ヨーロッパ 4 名であった。計 26 の分科会が設けられ、冒頭のパネルと基調講演をのぞいて、随時同じ階で 2 から 3 の分科会が開かれた。

日本からの参加者としては、ジェトロ・アジア経済研究所バンコック研究センターから加賀美充洋所長ほか計 3 名が「アジアの経済統合」について発表し、注目を集めた。そのほか杉山知子氏が「ラテンアメリカの人権問題」、山田陸男が「ブラジルとラテンアメリカにおける治安不全のコスト」について発表した。

今後の大会は、2012 年にマニラ、14 年に京都で行われることが決定された。京都大学地域研究統合情報センターの村上勇介氏が、開催機関代表として提案を行った。

今回の大会の実行委員長は、ハリスコ州立のグアダラハラ大学の Enrique Valencia Lomeli 教授であり、同大学の太平洋研究学部の教員スタッフが彼を支えて、効率的な運営が行われた。慣例により、実行委員長が次期会長に選出された。

大会の財政に関しては、グアダラハラ大

学が 47.1%、アデナウアー財団 34.5%、西部技術研究院 (ITESO) が 18.4% を提供し、財政面で無理のない企画であった、とのことであった。

終了直前に全参加者に評価が配られ、その集計結果をみても、開催通知、組織、運営、関係機関との連絡協力、会場、開催地などに関して、圧倒的に「極めて良好」という評価が多かったが、私自身の個人的な印象とも合致していた。

大会後の 27 日には、市内の国際展示場でラテンアメリカ最大規模の FERIA de Libros が開催され、時間に余裕のあった私はそれにも参加することができた。メキシコ、中米、南米北部の治安問題（麻薬取引、警察、マラスなど青少年非行犯罪組織など）に関する多くの本を購入し、出版データを入手することができた。

人口 600 万のメキシコ第 2 の都市であるグアダラハラは、北部の国境都市を中心に麻薬戦争で騒然としてきたこの国の中でもまだ治安もよく、首都のメキシコ市に比べて大気汚染もはるかに少なく、快適に過ごすことができた。郊外の民芸村のトナラーで智恵と学問の象徴であるトラフズクの石の彫刻を求め、苦勞して持ち帰り、書庫兼書齋の外に据えた。

帰路メキシコ国立自治大学の Adalberto Santana 教授と Ma. Elena Ozán de Zea 女史を訪ね、本年 7 月 11 - 13 日にパレンシアで開催される FIEALC 第 15 回大会の告示を受け取った。

できるだけ多くの会員諸氏が CELAO IV と FIEALC XV に参加されることを期待するが、詳しくは、次の URL を参照して頂きたい。

<http://www.cucsh.udg.mx/sitios/CELAO2010/index.htm>

<http://congresosfiealc.org/>

http://www.cecies.org/proximos_mas.asp?id=311

6. 新刊書紹介

細野昭雄

『南米チリをサケ輸出大国に変えた日本人—ゼロから産業を創出した国際協力の記録』
ダイヤモンド社、2010年7月刊、192頁（紹介者：村瀬幸代 上智大学）

振り返ってみれば、2010年は例年になく「チリ」という国名が日本のニュース・メディアに頻出した年であった。2月27日の大地震では、コンセプション市街地での混乱の様子や沿岸の街ディチャトでの津波被害の様子などが連日報じられた。6月にはサッカーの世界カップでのチリ代表が活躍を見せ、8月5日に発生した鉱山の落盤事故では約70日後の救出劇が非常に大きな注目を集めた。しかしながら、そうした報道においては、チリという遠く離れた国が実は我々の日常と深く結びついた存在であることについて、多くが伝えられることはなかった。

チリ産の食料品は、今日の日本人の生活において着実に存在感を増しつつある。ワインを始め、ブドウやレモンといった果物、またウニなどの海産物をスーパーマーケットで見かけることは珍しくない。中でもサケは、コンビニの弁当やおにぎり・回転寿司の材料としても浸透を見せており、いまや日本が輸入している冷凍サケの約7割はチリ産である。

本書は、そのチリのサケ産業について、誕生から一大輸出産業として確立・発展するまでの過程を分析・考察したものである。JICA 研究所「プロジェクト・ヒストリー」研究の第1巻として刊行されており、分析にあたっては随所で JICA の技術協力「日本／チリ・サケプロジェクト（チリ水産養殖プロジェクト）」の貢献に焦点を当てている。第1章～5章は産業発展過程の分析にあてられており、チリにおけるサケ養殖技術の最初の導入と人材育成が行われた産業発展の準備期（第1章）、続いて海面養

殖の成功をきっかけに大規模化が進み民間事業としての採算性が実証された事業化期（第2章～3章）、その後民間企業による投資と生産拡大が起こった発展初期（第4章）、そしてその後の発展期（第5章）というように段階を追って分析が進められている。第6章および第7章では、地元経済発展への貢献と産業人材の養成という二つの視点から、サケ産業発展とそこでの日本の国際協力プロジェクトの役割について改めて考察している。

本書の特徴はまず、日本とチリとのつながりが、具体的な人々の営みを通し非常に分かりやすい筆致で描かれているという点にある。著者の極めて豊かな人脈と広範な取材に裏付けられた詳細な記述により、読者は、「チリ人と日本人がさまざまな形で緊密につながって」いることを、チリのサケ産業発展に関わった多くの人物の貢献という形で知ることができる。また本書は、産業発展の事例研究としても非常に興味深い一冊である。約40年間という長期にわたる通時的な分析の結果には、恵まれた自然条件の活用・新技術の積極的導入・それらの過程における政府の役割の在り方など、チリの他の輸出産業との多くの共通点を見出すことができる。サケ産業の発展によって創出された雇用の質の問題や、著者が今後の発展課題として指摘している魚病対策とも関連する抗生物質使用量の問題など、十分に明らかにされていない点も残されているが、本書には産業クラスター発展の条件など他のラテンアメリカ経済研究の近著とも共通する重要な論点が含まれており、是非とも一読をお勧めしたい。

原田金一郎『貧困からの脱出—ペルー、ビジャ・エルサルバドル市の体験』
ふくろう出版、2010年10月刊、160頁（紹介者：辻豊治 京都外国語大学）

本書は、著者が永年にわたって関わってきたペルーのスラム都市、ビジャ・エルサルバドル（以下、VESと略）での聞き取り調査を軸にした研究をまとめたものである。聞き取りの対象者は、VESの政治的思想的指導者たち、工業団地の企業家たち、市役所の局長クラス、女性組織と教会の関係者、精神衛生センター関係者、ある拡大家族の成員たちである。それぞれの証言からVESの成り立ち、問題点や課題、人々の考え方、貧困の実態が垣間見えてくる。

グローバル化を政策的に促進する新自由主義の行き過ぎが明らかになった今、その最大の弊害である貧困の拡大をいかに阻止し、改善していくかが、第一の国際的課題であることはミレニアム開発目標のなかでも明示されている。これに呼応するかのように企業による社会的事業、BOPビジネス、先進国のNPOによるマイクロファイナンスの取り組み（Kiva、MFICなど）、その先輩格にあたるグラミン銀行の活動が注目され、国際機関、国家（ODA）、企業、市民社会（NGO-NPO）の各レベルでの実践例、成功例が報告されている。しかしいずれも主に先進国からのアプローチであり、グラミン銀行にしても農村共同体をベースにしているが、市民社会からの取り組みである。この意味でVESの在り方は、都市のスラムといういわば貧困の現場から発する開発モデルということになろう。本書で言及されているように、生活基盤の改善、工業団地の創設、市制への移行、医療体制の整備、教育の充実（初等教育から大学の設立まで）などがVESにおける貧困克服の具体的成果となっている。

本書では、VESのこのような発展は当初、社会主義と共同体原理を融合させたマ

リアテギの考え方を行動の指針とするCUAVES（VES自主管理都市共同体）と名付けられた住民組織によって主導され、その後、人口の増大やグローバル化などの外部環境の変化、市制の施行に伴い、市当局による現実主義的な政策に移行していった、とVESの変遷を整理している。この点については、第2章でCUAVESの社会主義的視点とVESと雖も外部環境から無縁の「島」ではありえないとする現実主義の対立として紹介されている。著者の立場はVESの「島」としての存在をむしろローカル・エンパワーメントの起点と捉え、その可能性を探ろうとしている。しかしいずれの立場も、VES発展の原動力はあくまで内発的な共同体原理にもとづくとの認識に立ち、著者はこれを「内発的自力依存的開発戦略」（西川潤）の実践例として積極的に評価している。

女性組織、精神衛生センター、拡大家族とのインタビューをつうじて貧困の実態は、物質的な欠乏とともに精神病理やジェンダー、DVや家庭崩壊などの問題であり、人間開発にとり食糧や雇用の問題とならんで教育や医療の重要性が改めて実感させられる。貧困削減をめざすラテンアメリカ発の開発モデルの実践例として、あるいは貧困と闘う現場の生の声として、本書の一読をお薦めしたい。

田中祐二・小池洋一編

『地域経済はよみがえるかーラテン・アメリカの産業クラスターに学ぶ』
新評論、2010年12月刊、432頁（紹介者：富田与 四日市大学）

日本とラテンアメリカの双方を見据え、空間経済学などを理論的な準拠点としながら、現状分析から将来への提言を示した、こういってよければ挑戦的な論文集である。

開発問題に関心を持つラテンアメリカ研究者として、また、地方大学の経済学部籍を置く教員として本書を読ませていただいた。地域の経済関係や行政関係の方などから、「ラテンアメリカの経験に何か学ぶべきところはないか」としばしば問われる。そこには、本書が提起する、「地域経済はよみがえるか」と言う問いかけと、いまや世界の成長エンジンのひとつともなっているラテンアメリカにヒントを求めようとする問題意識がある。確かに、新自由主義的な経済政策の導入により、1980年代に経済自由化やグローバル化の洗礼を受けたラテンアメリカ諸国は、その渦中にある日本のモデルとなりうる。答えを急ぐ読者には、各章のタイトルですでに手掛りが示されている。「ローカルな革新システムを生み出す」、「比較優位の活用から競争優位の創出へ」、「高付加価値農産物の輸出を梃子に過疎地を蘇らせる」、「消費者と手を結ぶ」、「世界市場と地域を結ぶ」、「協働が生み出す革新システム」。本書を構成する「産業クラスター」の理論（第Ⅰ部）とそれに基づくケース・スタディー（第Ⅱ部）全体が、これら提言を説得力のあるものになっている。

第Ⅰ部では「産業クラスター」に関する理論的分析がなされる。「産業クラスター」とは地理的に集中した特定分野における産業集積のことで、グローバルに展開するGVC（グローバル・バリュー・チェーン）のネットワークの中に産業クラスターが形成され、そこでは競争と協力が作用する。

そうした産業クラスターを背景に「規模の経済」や「範囲の経済」などを生かしながらイノベーションを軸とした産業育成がなされ、地域経済が成長すると説明される。実践例を紹介した第Ⅱ部ではラテンアメリカの6つの事例が紹介される。「メキシコ・グアダハラハの電子産業」、「ブラジルのバイオ産業」、「ブラジルの航空機産業」、「メキシコの自動車産業」、「中米・カリブのアパレル産業」、「チリのワイン」、「メキシコの温室トマト」、「コロンビアの切花」、「ブラジルの農業」、「チリのサケ」、「ペルーのアグロツーリズム」。本書では、そうした産業クラスターは戦略的に創造できるとされ、その上で、「地域の既存資源の活用」、「新しい資源の創造」、「外部企業の参入による上流と下流とのネットワーク化」、「行政、研究機関、同業者組合などをも包括した制度の厚み」、そして「地方分権化と連帯経済運動」が戦略的な要点として指摘されている。

何度か読み返すなかでひとつ疑問なのは、少なからぬ論者により「低信頼社会」とされてきたラテンアメリカ諸国にあって、産業クラスター形成の内的な資源とも言うべき「信頼」はどこに隠れていたのか、という点である。実践例をもう一度熟読してみることにはしたい。いまの地方大学に期待される役割のひとつは、その辺にあるような気がする。

7. 事務局から

・所属・住所等に変更が生じた場合は、速やかにその旨、事務局までご連絡ください（会費の払込票に新住所を初めて記載される場合には、念のため「通信欄」にその旨お書き添えくださると助かります）。なお、その際、個人情報保護の観点から、会報掲載への可否を必ず付してご連絡ください。

I. 会員関係

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

II. 会員の仕事など（事務局宛送付分）

- 『人間文化研究機構イスラーム地域研究推進事業 実績評価報告書』（人間文化研究機構 地域研究推進委員会）、2010年11月刊。
- 「伝統養蜂と近代養蜂のはざまで—メキシコ合衆国カンパチェ州ラ・モンターニャ地域における養蜂文化—」（上智大学イベロアメリカ研究所）『ラテンアメリカ研究（ILA）』No.35、2010年11月刊。
- 『イベロアメリカ研究』（上智大学イベロアメリカ研究所）第XXXII巻第2号、2011年1月31日刊。
- 『貧困からの脱出—ペルー、ピジャ・エルサルバドル市の体験—』（原田金一郎）、ふくろう出版、2010年10月9日刊。

III. 会費納入のお願い

学会会費を未納の方は、下記の郵便振替

口座にご送金願います。会則により、会費を連続して2年間、無届で滞納した場合は除名となることがあります。

口座記号番号：00140 - 7 - 482043

加入者名：日本ラテンアメリカ学会

編集後記

3月11日以来、日本列島を激震が襲っています。東北地方太平洋沖地震や津波災害、原発事故により被害を受けた会員の皆様やそのご家族、関係者に対し、この場をお借りして、心よりお見舞い申し上げます。会員各位の元には海外からも励ましや連帯のメッセージが届いたことでしょうか。様々な困難が表面化して今後の見通しがつきにくい状況ですが、いま問われているのは日本社会のあり方や市民社会の潜在力かもしれません。一刻も早い復興と深刻な状況の改善を願わずにいられません。ラテンアメリカ研究から得られる経験や知見が少しでも役に立てばとも思います。

本号には寄稿や新刊書紹介が複数寄せられ、定期大会や研究部会の情報と相まって、春の号としては充実した内容になりました。学会活動の活性化については理事会でも色々なアイデアが出され、知恵が絞られつつあります。研究年報や学会ニュースとの関連で会報が果たすべき役割についても模索していければ幸いです。

（新木秀和）

No.104 2011年3月31日発行
学会事務局
事務局 〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
東京外国語大学受田研究室気付
TEL 042-330-5252
FAX 042-330-5406
（海外事情研究所方 受田宏之宛）
メール ukeda.gakkai@mbr.nifty.com

日本ラテンアメリカ学会若手支援制度申請書

年 月 日記入

氏 名		生年月日	年 月 日
所 属	現在の所属機関・職名		
	(院生の場合)	大学	研究科 課程 年
連 絡 先	(〒 -) メールアドレス：		
	TEL：	FAX：	
発表予定学会名 英語・スペイン語・ポルトガル語以外の場合は和訳を付記			
学会開催年月日	年 月 日 ~ 年 月 日		
開催場所	国名	都市名	
	会場名		
旅行費用	総額 (内訳：運賃 滞在費)		
	主催者等から費用の一部を支弁されている場合はその金額		
発表タイトル 英語・スペイン語・ポルトガル語以外の場合は和訳を付記			
発表の要旨			

学 歴	
-----	--

職 歴	
-----	--

発表テーマに 関連した業績 (2点まで)	著書名または論文名	発行所または掲載誌名	年	

審査担当委員 所 見	
---------------	--

※申請資格 (事務局で記入)	会員歴： 年入会 会費納入状況： 年度まで完納 本学会からの助成受領経験： 年に 円を受領
-------------------	---